

最新のカルト情報と日蓮宗の対応について

楠山 泰道

一 顕正会問題についての省察

持ち時間が一時間ということで、カルト問題の詳細を提議するには時間が短く、最新の情報をお伝えするだけでも足りないと思いますので、皆様が一番知りたいと思われる団体の情報に絞ってお話します。

日蓮宗として、認識しておく必要がある教団は、「法華系カルト」と世間でいわれている諸団体であり、その中で特に問題なのが、強引な勧誘活動を展開して逮捕者を出し、強制捜査などが行われている「宗教法人顕正会」です。

この組織は全国的に支部を作って拡大し、各管区でもこの団体の強引な勧誘による被害に加え、寺院を訪問し法論に及ぶという事態の広がりが見え、これにどう対応したらよいかとの問い合わせや相談が私のところに来ています。

強引な勧誘や寺院への法論も「折伏」と称する顕正会の活動の一部であり、昭和三十年代～四十年代の創価学会、第三代会長池田大作氏を中心となって推し進めた「折伏大行進」とよく似たものです。

しかし、今と当時では社会環境が異なり、いわゆる「貧・病・争」の内容が違うという認識が必要です。勧誘のターゲットとなる階層も異なります。

創価学会が勢力を伸ばした高度成長時代は、社会の底辺に据え置かれた階層の豊かになりたいという願望が大量入

信の社会的背景にありました。しかし、現代は物質的には充足していません。したがって、以前とは違う理由があると
言えます。

一言で言うと、今日の社会では、社会的不適応の傾向の強い若者や自己実現できないことに不満を持つ高校生、大
学生を含む若者などが入信しています。

男の子ではもともと強くなりたい、誰かから必要とされたいという願望を持ち、組織の先輩にあこがれた結果入信に
至るといふ傾向が見られます。

女の子では「宿命転換」という言葉に魅力を感じたり、「初心の功德」などという偶然的ラッキーな体験で単純に
信じてしまったり、若い主婦で子育てなどに悩んでいる人の入信が多く見られます。しかし、勧誘方法や日蓮宗寺院
への仕掛けなどは、初期の創価学会のような原理主義的なものへの回帰です。

入信した者と話してみても分かることですが、若いメンバーの多くは教学について基礎的な理解をしているようには
見えません。顕正会はご遺文（『御書』）からの引用を多用し、ある種の保守十全主義の形をとっていましたが、教学
を自分から学習しているようには見えません。会員たちの話はまるで吹き込まれたテープを再生しているようにほと
んど一緒です。知っていること以外のことを尋ねると答えに窮しますが、そういう場合、すべて会長先生がご存知で
あるとし、さらにそれが「日蓮大聖人の仰せのとおり」となり、正当化を図ったつもりになります。

顕正会の信者は教学のテキストになるはずの『御書』を持っていません。彼らの教学学習とは、折伏理論書『日蓮
大聖人の仏法』『日蓮に帰依しなければ日本は亡ぶ』『顕正新聞』などの紙メディアを何度も読むことに加えて、会長
の講演を記録した映像や音源CDなどを聴いて覚えることです。その学習成果は、定期的に行われる「昇級試験」、
「登用試験」などで試されますが、その回答方法はカッコ埋めであり、いかに基本文献を「暗記」しているかに重点
が置かれています。つまり、自分でご遺文を読み、教学の理解に関する他の文献や辞書などを使って、主体的に理解

していくという作業をほとんどやっていない状態なのです。

さて、「宗教的カルト」という用語は、オウム真理教事件や統一教会の問題でマスコミが使う言葉であり、定義が成立しているわけではありませんから、使用には慎重でなければなりません。しかし、その特徴の一つとして指摘されるところは、自分で考えて研究することや、場合によっては自分の信じる立場とは違う立場からの評価に照らし合わせることを最初から拒否する傾向が強いという点です。基本のテキストもなく、他の意見も参照しない、全てが権威者の仰せの通りであって、それ以外の者の意見や評価を受け入れない、さらには、そうした外部からの評価を「魔」がなさしめているものと決め付ける態度をとり続けるならば、「宗教的カルト」と呼ばれても仕方がないと言えます。外部からの価値評価に耳をふさぎ、さらに自分で考えることをしない、そして、他からの意見を受け入れることは悪であり、その報いで「罰」を受けることになる、醜い死相とともに無間地獄に堕ちると信じているとしたら、社会的存在として好ましくないと評価されるのは必然です。

そうした意味に限定すれば、現在の創価学会は、教学・仏教学・社会学他に関する研究部門も整い、自前の大学も備え、さらには他の大学の中に学者をおいて、さかんに研究をしています。もちろん、「会長」に関してその権威を侵すような言説を避けるという「組織の論理」が存在するかぎり、完全なアカデミズムに担保されたものではありませんが、それなりの学問的なレベルを保っているとは言えます。

しかし、顕正会にはまずは日蓮遺文に関する基本テキストがない。とりあえず、顕正会が依拠しているのは日蓮正宗の「大石寺版」のようです。しかし、現在、大石寺（ならびに創価学会）とは重要教義である「国立戒壇」の正否に関して対立しているはずなのに、「大石寺版」の遺文集を使っている者が会ったことがありません。彼は、私と会ったことを理由に顕

元顕正会の会員で、大変熱心に教学を研究している者に会ったことがあります。彼は、私と会ったことを理由に顕正会から退会処分されました。本人は、顕正会こそが日蓮聖人の唯一の正しい仏法を体現する団体であるという信念

があり、その信念に基づいて顕正会を正しい方向に導きたいとの思いにおける行動だったのですが、その結果は退会処分。本人は退会するつもりはありませんでしたので、反論したのですが組織は受け入れませんでした。このあたりにも顕正会の体質が見えます。

その当時の「顕正新聞」に、私の名前が載っておりまして、その評価は「顕正会を誹謗する身延派坊主」でした。ちなみに、「身延派」という言い方は存在しないものです。また、私自身日蓮宗の立場から顕正会の教義批判をしたことはありません。私の視点は、「ある宗教組織に関わることで引き起こされる家族の問題」「入信トラブル問題」の相談に対応しようとするもので、特定教団の思想、信条、実践や行動について批判するものではありません。どんなに荒唐無稽な「教義」でも、その出身家族に過大な精神的、物理的圧迫を加えるものでない限り、問題にしません。私がやっている仕事は、オウム問題でもなく、顕正会問題でもなく、他の特定教団を異端視して批判するようなものとは断じてありません。私は、カルト問題、オウム真理教、統一教会など、社会内の宗教組織としてはどう見ても「行き過ぎ」の行動をしている団体に対して警告を発し、それらの団体の入信により苦しんでいる家族や本人を救済する手助けをしているだけなのです。

二 押しかけ法論

さて、日蓮宗寺院への押しかけ「法論」のことですが、なぜそれが行われるのでしょうか。

顕正会に限らず顕正会の他にも、大石寺系列の諸団体が日蓮宗寺院に押しかけ法論するケースが以前に比べて増えているようです。この背景や理由を宗門として分析し、訪問を受けた場合の標準的な対処の方法を全国寺院に告知した方がよいと思います。日蓮宗の本山や由緒寺院、特に、大石寺教学に強く結びいている由緒寺院：たとえば、龍口法難、佐渡法難、ご生誕、修学、そして棲神の地身延山などを日蓮宗が占めていることに強い反感を持っているとい

うことを、我々は特に認識すべきであろうと思います。我々にとつての御降誕八〇〇年、また、龍口法難七五〇年は彼らにとつても同じです。

そして、彼らにとつての我が宗門は正統血脈を違えて身延山を占拠し、「本仏日蓮大聖人」の唯授一人血脈相承日興聖人を排除した者たちという認識を持っていることを忘れてはならないです。ただし、この押しかけ法論は一種のパフォーマンスという面があります。俗な言い方をすれば「きもだめし」であり、先輩が後輩に「勇ましさを見せるためのもの」でしかありませんが、訪問時の当方の対応が写真やVTRに記録され、映像的な加工を施されてネットに流される可能性があることも注意が必要です。

さて、話は換わりますが、ご存知のようにこの「大石寺系」の三団体、すなわち、日蓮正宗（妙観講）・創価学会・顕正会は、様々な歴史的経緯から相互に激しく争っています。

根本に同族の近親憎悪がありますから、余計に激しくなります。しかし、この内部闘争が入信トラブルによる被害者を生産、再生産する要因になっています。しかも、根本教義（日蓮本仏論、人法一箇など）にあまり違いがないため、教義論争というよりも、政治的な主張（原発問題や外交問題など）やスキャンダル（反社会的な勢力との交際問題）などの事柄をめぐって言い争うという不毛なものになります。

また、これら三教団の宗教の傾向は現世利益主義です。どちらが御利益があるか、罰が当たるかというような宗教で、日蓮聖人の教えとはかけ離れています。会員数をより多く獲得することで生き残りを図るといった戦いです。この余波を我が宗門の各寺院が受けていると私は見ています。

三 私がかルト問題に関わった経緯

私がかルト問題に関わることになった動機ですが、べつに好き好んで始めたわけではないのです。たまたま、統一

教会の問題に関わっている牧師が同地区内の高校で教師をしており、そこで作られた人間関係から「オウム」問題に関わることになりました。

そして、時間の経過とともにオウム問題は沈静化しましたが、それと並行して他の組織への不信トラブルの相談が持ち込まれました。こうした流れの中で約二十年が経過しました。

当初は高校の教師という立場で、青少年の非行問題やいじめ、不登校、家庭内暴力などの問題と同じカテゴリー、つまり、親子のコミュニケーションの断絶、あるいは対立の問題として取り組んで来たということです。

日蓮宗内の機関として社会福祉法人立正福祉会があり、その傘下に全国家庭児童相談室連絡協議会があります。オウム事件の当時、私は「神奈川二部妙伝寺家庭児童相談室」の室長をしていました。ここに、統一教会に関わった女性が両親とともに訪れ、説得の後に脱会を自主的に決意することを促したことから、「カルト問題」との関わりが始まりました。この女性の父親は地元の教育委員会におり、もともと私のところで相談対処してきた青少年の非行問題で面識がありました。また、母親は当時、統一教会で被害を受けた家族の救済をしているキリスト教牧師が開設する「統一教会被害者家族の会」へ参加していました。

やがて、オウム真理教の一連の事件の始まりとなった、「坂本弁護士一家殺害事件」という当時未解決ながらオウムの関与が疑われた事件が起こり、入信者の親たちが心配して相談の窓口を求め、ある牧師のもとを訪れたのです。しかし、統一教会は言うまでもなくキリスト教をベースに編集した宗教ですが、オウムのベースは仏教です。この点を考慮した牧師が「オウム真理教の教義は仏教のようですから、仏教関係の方で、この問題に関わってくれる方を知りませんか？」と統一教会の家族の会で相談されたそうです。そこで母親が私を紹介し、その牧師から電話があり、コンビを組んでこの問題と向かい合うことになりました。

このカルト問題は様々な分野の人たちとの協働が必要です。横浜弁護士会が弁護士の立場において「オウム一一〇

番」を開設し、そこに多くの相談が寄せられました。その相談の受け皿となったのが最初で、次第に当相談所における被害者家族の会への参加人数も増え、月に数回の集会を持つことになりました。

この相談者家族の会を束ねた会長は熱心な日蓮宗の檀家で、オウムに入信した息子も子どもどころ身延や中山に参拝したことがあるという話をしてくれました。しかし、その父親が私に最初に放ったのが、なんと「坊主なんか信用できるか」という言葉。なぜそのような言い方になったのか、すぐに分かりました。このオウムへの入信問題について最初に一家の菩提寺に相談し、次に日蓮宗のお寺を何箇所か回ったところ、それら全てで玄関払いされたそうです。こうした経緯で、日蓮宗に対しては不信感を通り越して憎しみすら感じていたようです。

同じような経過で、それぞれの宗派のお寺に相談してもまったく対応してくれず、「人が宗教の問題で苦しんでいるのに、何も対応してくれない。檀家でいる意味を感じない。墓地をもどこかへ移したい」とまで考えた親もいました。

統一教会の被害者救済の問題をきちんと対応してくれるキリスト教の教会・牧師の存在と比べて、「宗教問題」と人の「苦」の問題に答えることができない仏教寺院。あるオウム元信者は「お寺は風景に過ぎない」と述べたと伝えられています。オウムに入信した若者たちだけでなく、その親の世代にも、仏教寺院に対して何の希望も与えられなかったという事実を再認識していただきたいと思います。

私は和尚であることに自意識過剰な者だったかも知れません。「あなたの息子さんを脱会させるまでは、この問題から手を引きません」とつい言ってしまいました。これがその後の二十年間の底なし沼の始まりでした。

四 オウム問題は終わらない

今年で、オウムによる地下鉄サリン事件から十八年が過ぎました。私の所属する「日本脱カルト協会（JSCP

R・西田公昭代表」の主催で、代々木の会館で公開シンポジウムを開催しました。テーマは「オウム真理教終結を見る」。個別の討議テーマは「何が終結なのか」「なぜ優秀な若者が無差別殺人にいたったのか」「オウム真理教のよくなカルトがどうして発生するのか」「十三名もの死刑を言い渡した日本のカルト問題に対する認識は、死刑で本当に終結できるのか」「日本の宗教はこれでいいのか」です。簡単に言えば、事件の原点に返って何が解決され、何が解決されないままであるのかを検証しようというものでした。

こうした包括テーマ、個別テーマについて、当事者である被害者、弁護士、オウム真理教被害者家族の会、地下鉄サリン事件被害者の会、各会の代表が発言しました。オウム真理教という宗教に入信して、殺人テロまでしてしまつた信徒の家族と、そのテロで犠牲になつた家族の会、この両者が顔を合わせ開いた公開講座。感想を一言で言えば、なんとむなしく、なんと悲しく、そして重苦しい。なぜかと言えば、どちらも被害者だから…。

カルトの事件はそれに関わつて全ての人々に癒やしがたい傷を残すだけです。なぜ、これを予防できなかったか、そして、小さな火の内に拡大を抑えることができなかったのか。

この問題で日本の宗教者における責任の所在は明らかであると思います。当時は、「そんな危ない事件に関わるな。正しい宗教はほつとも分かる」と言っていた仏教関係者は今、私の問いにどう答えて下さるでしょうか。

当時、オウム問題に関わつた全ての人々が命の危険を大なり小なり抱えていました。自分もいつオウムの攻撃に遭うか分からないという危機感を持っていました。「宗門も仏教界もあてにできないのならば、自分の身は自分で守ろう」。私は、当初から関わつた牧師、弁護士、ジャーナリストと相談して、日本脱カルト研究会（J D C C・高橋紳吾初代代表）を立ち上げました。今の日本脱カルト協会 J S C P R の前身です。

当初、事件が社会に与えた深刻な影響から、何人かの有名無名の仏教関係者が J D C C の会合に出席しました。しかし、それは最初の頃だけだったように思います。

また、オウム、ならびにオウムに参加した子どもたちの宗教意識が、実は痛烈な我々伝統仏教に対する絶望と批判によって成り立っているという事実。この事実には、仏教それ自体の存在理由に対する自己検証が必ずや要です。仏教の根本目的は「抜苦与楽」、日蓮聖人の宗教の根幹は衆生救済、この救済行をその時代において、その社会の現場において自ら引き受ける者が僧侶。もし、そうした志がなければ、「寺は風景」であり「僧侶は無用の存在」という批判を浴びることは必然です。もつといえ、お寺がダメだからオウム真理教に入ったと言っても必ずしも論理の飛躍とはならないでしょう。

オウム以後のカルトはお寺から人々の信頼が失われ、救済宗教としての実が失われていることに気がついてしまったらしく、実に痛切な嫌みの言葉を並べます。

「お金を取る宗教は悪い」「あなたたち坊主は戒名料はいくらとっているんだ」「檀家をだましてたくさんの布施を巻き上げて心が痛まないのか」というもの。自分の組織はお金がかからないから正しい宗教だと言いたいようですが、私に見れば、それよりも大事な人生、友人、身も心もぼろぼろにされることをわかって欲しいのです。実は、カルトの悲劇は入信者自身の人生が狂わされることです。最大の被害者は入信者自身であるということです。心を組織にコントロールされてしまった彼らに、私たちの言葉は容易に届きません。カルト問題は、オウム真理教事件以来、さらに深刻化しているという認識、すなわち、寺離れ、葬儀離れなどという社会事象と平行してこの認識を深めるべき時であると思います。

五 日蓮宗はカルト問題とどう向き合うべきか

今日ここでカルト問題について、しっかりと認識しておいていただきたいのは、われわれ僧侶はこの問題から目を背け、無頓着にならないでいただきたいということです。「カルト」の定義がどうであろうと、宗教を名乗り、宗教

のあるべき範囲を逸脱する組織に対して、「あなたの宗教は宗教から逸脱しています」とイエローカードを発することを、異議申し立てをすることも、宗教者の責務、あるいは職分であるとあえて申し述べたいと思います。私が主張したいのは、宗教の逸脱に対して何も語れない宗教者はダメ、この一点です。

各宗派それぞれこの問題に関わってくれている僧侶もいますが、ややもすると、自分の所属する宗派、教派の正当化というところに接点を置く傾向があります。例えば「親鸞・浄土・念仏」ならば浄土真宗関係、法華系新宗教ならば日蓮宗、キリスト教をアレンジしたものはキリスト教の牧師や司祭、というような区別を立てるべきではないという事です。

私の接点は、一つには入信による家族の混乱、本人の人生が不当に詐取されるというものですから、広義に言えば社会問題です。カルト問題、宗教逸脱の問題に対しては、どの教団でも区別しないで取り組んでもらいたいと思います。関わるうちに教義は違っても手口や方法が似ていたり、入信動機、マインドコントロールの手法が同じであることが必ず分かります。この点に限れば、カルト問題とは本来自由であるべき人間の精神、基本的人権に対する侵害であり、自己実現を当為とする人間の人生の組み立てに対する不当な介入です。

さて、私は仏教関係の講演に頼まれて、このカルト問題のお話をさせていただきましたが、いつも残念に思うことがあります。「カルト」と「オカルト」の区別、「マインドコントロール」と「洗脳」の区別さえもわからない僧侶がいるのです。オウム事件という戦後史に特筆される「宗教の事件」を経験しても、そのことの重大さに関する認識に欠ける教師が多いという事実です。

また、別の話ですが、本宗でも宗会や全国宗務所長会議という宗門の公式の会議に、特定のカルトから派遣された新聞記者が堂々と取材に入っていることにも無関心です。彼らは日蓮宗を彼らの立場、つまり、組織の防衛のために情報を集めているのです。そして、あるうことかその新聞に広告を出すという教師もいます。

もちろん本人が最初からカルト関係の新聞の記者ですとは言いません。でもその新聞の広告や内容を見ると、その教団関係の宣伝や教義が記載されているので分かります。その新聞社の住所を確かめれば、そこにはカルト関係の所在するビルがあるはずです。少なくとも、宗門の重要決議をする会議に、どこのマスコミ関係かも確かめないで取材を許可するのは軽率です。もっとしっかりした情報収集と危機管理をすべきなのです。

その意味では、しっかりとした情報収集をしたり、カルト対策委員会などを常設するべきです。このような管理をして、宗門関係者に正確な情報を提供すべきです。そうしないと、カルト被害者側から宗門に苦情や警告が出されかねませんし、カルト協力宗派とされ、社会から批判の対象になりかねません。

六 さまざまな「問題のある教団」

最初にお断りしておきますが、この後に情報提供する教団を私は「カルト」と断定しているわけではありません。家族がその教団に関わり、その結果としてその事態を「被害」と感じる相談者の意識の上では「カルト」でしょうが、私の認識とは異なります。あくまでも相談の対象となった団体に限っての報告ですので、その点をご留意下さい。

「カルト」という言葉の定義はあいまいであることはすでに述べました。マスコミが使う「カルト」という言葉は「危ない組織」という範囲でしょう。私の認識範囲は、市民社会を一方的に敵対視し、非常に偏った人間観や世界観、純粋な信仰・信心・献身という名における信者への煽り、自分の組織の信条だけが正しいという排他独善主義などを色濃く示す教団群の範囲です。

日本で唯一のカルト問題を総合的に扱う組織であるJSCPR（日本脱カルト協会）では、「集団健康度チェック百十四項目」というものを提示して各組織の危険度を測ることにしています。これは今まで問題のあった集団、特にオウム真理教や統一教会のカルト性を資料にして作ったもので、この数値を以てしてもカルトとは断定できません。

しかしそれなりにオウム真理教を百点満点としたら、それに比べて何点位からカルト性が高いのかというところは、できると思います。少なくとも二十点取ればかなりのカルト性があるとしてよいと考えています。私の相談室は相談に来た被害者本人や家族に対して、この「チェック表」でテストをして点数に応じた相談をすることになっています。

① 「顕正会」に関する最近の情報

顕正会は、相変わらず高校生への勧誘の問題が多く出ています。ある高校では、入信した生徒の勧誘がひどく、学校側は保護者へ「顕正会という宗教団体が勧誘をしていますから注意してください」というような文章を配布しましたが、顕正会は学校に来てその内容に抗議し、結局校長は謝罪文を出すことになりました。顕正会はその写真を顕正新聞に載せ、自分たちの正当性をアピールしました。このことは、今後の高校生勧誘予防には大きなマイナスとなり、他の高校で勧誘活動が活発化したときに腰が引けて、何も対処できない学校が増えることになるのではないかと心配です。

② 「アレフ」「ひかりの輪」

オウム真理教の本体は消滅しましたが、その分派である「アレフ」と「ひかりの輪」が相変わらず活動しています。そして、困ったことにオウム事件を知らない若者を取り込んで、組織が徐々に拡大していることが公安調査委員会の調査で判明しています。

今までのオウム真理教の教義そのままに活動しているのが「アレフ」。特に北海道の札幌ではこの団体が関係しているヨガ道場に通う若い人たちが会員となっていてと報告されています。一昨年札幌で脱会させることができた二〇代の元信者は、オウム事件のことはほとんど知りませんでした。また、使っていた教材CDなどを見せてもらいま

たが、あの麻原教祖の声でオウム事件当時の教団で使用していたテープと内容が同じものでした。

「ひかりの輪」は、「ああいえば上祐」という流行語にもなった、嘘をつくことがオウム真理教での役目だった広報役上祐史浩氏が主催する団体です。上祐氏は偽証罪で逮捕され、刑期が終わって「アレフ」に戻りましたが、アレフ内の派閥争いにより追放され、独立して「ひかりの輪」を立ち上げて活動を始めました。麻原崇拜を否定し、教義を変更して、霊地修行などを取り入れ、他とも積極的に接するようにと、建前だけは変わったように見せていますが、神秘体験の世界は忘れられないでしょう。

「ひかりの輪」の上祐氏が『オウム事件 十七年目の告白』という有田芳生氏との対談形式の本を出版しました。「やはり、ああいえば上祐 かな」という感想ですが、その後、ある新聞社の記者が上祐氏のところへ取材に行きました。その内容の一部ですが、

・聖地巡礼を行う理由は？……私自身、麻原への信仰を脱げるために、自然聖地の力、エネルギーが大きな助けになった。そのときの習慣を繰り返している。

・オウムを経験した他の会員も、オウムによる神秘体験や霊的体験の代替として、聖地の自然や波動を体感してもらう。

・聖地には単に土地だけではなく、日本の国土や宗教や文化がある。麻原が否定した尊い価値あるものを、体で感じるようにすることが重要だ。

・あなたがシャクティパットを行うのか？……シャクティパットはアレフ時代のもの。ひかりの輪では、全く同じこととはしていない。ただ、集団で共に瞑想するという形の『瞑想指導』は行っている。一緒に高い瞑想状態に導いていこう、という意図はある。

・シャクティパットはヨーガの行者が行っており、そこまで含めて悪いとは考えていない。自分たちは、自分たちな

りの儀式のやり方を持っている。

と本質的には麻原教祖の教義が根底にあることは間違いないのですが、麻原教祖を否定しながら、実はそのノウハウはしっかりと利用し、麻原尊師の代替の指導者になりたいのではないかと感じました。

上祐氏がサリン製造やその実験過程に立ち会っていたことは事実だろうし、事件のときロシアにいたことも、「危険を感じていたからなのか」など疑う要素はたくさんあるのに、罪状は偽証罪で刑期は短く現在に至るわけですから、当時から関係していた者にとっては納得できません。現在「ひかりの輪」は信徒は少なく、かろうじて存続している感じですが、これも教義変更で社会とかかわりをもつ路線に切り替えた結果、群集心理も団結力も弱まったのだと思います。

一方、「アレフ」では、自分の元妻（アレフ信者）を取り戻すためにと殺人事件までおこりました。取り戻したい気持ちにはわかりますが、その犯行が残忍かつ計画的で、懲役十三年という判決が出ました。また、麻原こと松本氏の娘が、「松本智津夫死刑囚の精神が正常ではない」という理由で再審請求しましたが、これも棄却されました。アレフ信者が恐喝罪で逮捕された事件もあるなど、問題が多いことも事実です。

どちらにしても、オウム真理教の無差別殺人事件は、宗教テロです。その犠牲者のことを考えたとき、決して風化させてはいけないと思います。

③高島易断「幸運乃光」

この団体による被害者による損害賠償請求事件が、平成二十年三月二十六日にありました。経済産業省は、訪問販売業者である宗教法人幸運乃光（通称名「高島易断崇鬼占（すうきせん）相談本部」、または、「高島易断総本部」）に対して、恐怖心をあおって高額な金銭を要求したとして、特定商取引法の違反行為を認定し、平成二十年三月

二十八日から三か月間、同法人の訪問販売に関する勧誘、申込みの受付及び契約の締結を停止するよう命じました。

どのような表現が、恐怖を煽る、違法なものだったのかを挙げてみます。

- ・ 神さまを拝まなければ家族全員地獄に堕ちる。それでもいいんですか。
- ・ もうこれは、本当に駄目だ。息子さんの運気がどんどん下がっている。これを何とかしなければ、大変なことになる。今すぐに神様に拝まないと、大変なことになる。それでもいいんですか。
- ・ 今、娘さんはしきりに助けを求めているというような意味の卦ですから、直ぐに助けてあげないと大変なことになるといことです。

・ 供養塔を建てて、その供養塔に向けて祈願を行えば、あなたの家系に降りかかる不幸を防ぐことができますよ。

・ 供養塔をいくつか建てて、それぞれの塔に対して祈願をすれば、あなたに覆い被さった四十年分の因縁や怨念をそれだけ早く祓うことができるから。

・ 一旦（契約金を）支払うと決めたものは、止めることはできない。

・ あなたは私の面子を潰す気ですか。もうあなたのために御札も作ったし、もう本山にも連絡をってしまったんですよ。

④ 真光元

二〇〇五年に岐阜県恵那市の「次世紀ファーム研究所」で、健康食品「真光元」で難病も治ると信じこまされた少女と母親が、インスリンを持参せずに「次世紀ファーム研究所」に宿泊し、少女が死亡するという事件が起こりました。少女の両親が堀洋八郎代表らに損害賠償を求める訴訟を起こしています。今年七月、東京高等裁判所が両親の訴えを棄却する判決を言い渡し、一審に続いて二審でも両親が敗訴しました。現在、両親は最高裁に上告中で、堀代表

の責任を認定するよう求める嘆願書への署名を集めています。薬事法違反かどうかも問われています。

自らを大御神様応化身（おおみかみさまおおげしん）になったとして神格化している堀洋八郎氏から、様々なやがらせや人権侵害を受けたと訴えている人もいます。現在では、真光元は「タイファー」という名前を使っていますが、名前を変えてもきちんと見届けるべき団体です。

今日のように科学が進歩していても、科学では割り切れないことがあることは事実です。しかしながら科学が解明した分野を否定し、非科学的な理論で人命を傷つけたり、恐怖心を煽ることは許されることではありません。明らかに「宗教違反」です。顕正会は死後硬直がないとか、成仏した顔は白く、地獄に落ちた顔は黒いなどと言って、鎌倉時代にスリップ・アウトして、当時の慣習や人々の認識としての知識をそのままに現代に移行して信じていますが、これも非科学的な迷信であると認識してほしいものです。次に「メンタルヘルス友の会」は、浄土真宗親鸞会系の新興宗教・真流一の会が、対人恐怖・視線恐怖などの神経症で悩む人々を「メンタルヘルス友の会」という、信者獲得のために経営しているダミー団体を使って宗教勧誘をしています。

⑤ 幸福の科学

同教団は最近、「幸福実現党」という政党を作って選挙に出たり、幸福の科学出版から多くの本を出版し、さらに幸福の科学学園として学校を開設、今は千葉県に大学を建てようとしています。

この団体に入信者を出した家族が訴えることの要点は、九次元や霊査などが絡む不合理な教義、高額な献金（植福）、それを原因として仕事や生活に支障をきたしたり、家庭が崩壊するなど、人生を棒に振っているという点です。同被害者の会は、そうした幸福の科学の実態を金銭面、教義面などから被害者の声も織り交ぜつつ、紹介することを目的としています。「どうか少しでも新しい被害者が出ないように、そして現会員の目を覚ますことに役立てばと、

そう願って止みません」と言っています。この宗教の被害は、主に経済面、精神面（「霊言」など不合理な教えによるトラウマ）、時間面の三つですが、関わった者にとつては、どれも回復は困難です。

幸福の科学の教義は、一部はオカルト預言、残りは教主大川隆法自身の「霊言」を通しての、他の大手宗教、既成宗教の折衷にあります。後者について言うと、例えば、キリストの霊が現れた、仏陀の霊が現れた、そうした他宗教の諸聖人が教主の大川に対して、多くの教えを伝えます。それ自体、およびそれを基に構成した道德論が幸福の科学の教義面の主なところです。

では、教主の大川隆法自身は何なのでしょう。他の宗教のそうした聖人達のただの媒体に過ぎないのか、ということではないようです。大川自身は、自らを大乘の仏陀、エル・カンターレという至高の存在、と主張しています。総括すると、自身はエル・カンターレとしてありふれた一般道德的なこと、教訓的なことを奇抜なオカルト的な話に交えて語りながら、しかしそれだけでは、信用性や集客力に劣ってしまうので、キリストや仏陀と対話したとしてその霊言書を出版して補っている、いえむしろその方が分量的に多くなってしまうのが大川隆法の教えであり、それを広めるための組織が宗教法人幸福の科学ということになります。

では、実際にこの人物は、どんな教えを宣べているのでしょうか。『太陽の法』（一九八七年）によると、

・金星人は、上半身植物、下半身人間の金星人（通称ユリ星人）止まりで、金星文明は失敗だった。大川隆法は地球以前に金星に人類と文明が創られたと語っている。

・地球人の肉體祖先は、三億六千五百万年前、マゼラン星雲からUFOで地球に飛来した、六千万人のマゼラン星人。マゼラン星雲から来た人々の指導者の魂は、霊界で、エル・ランティと呼ばれる神霊となった。このエル・ランティこそ、後のアラアの神、エホバ（ヤハウエ）である。エル・ランティの計画により、地球人の魂は、パイトロンという霊界の装置で数百億人分創られたが、質が悪かった……。

「早稲田祭」の公式サイトには、「心のエステ」「早稲田生よ、大志を抱け！」の企画が掲載されています。ともに、主催団体が宗教団体による布教目的のサークルであることは明示されていません。これは幸福の科学です。今年は「早大HAPPY SCIENCE」として出店したそうです。また、選挙では、選挙区・比例区で規定の得票数に達せず、計十一億円を超える供託金をすべて没収されました。そのほか、二〇一二年九月に尖閣諸島に上陸した幸福実現党員のミュージシャン・TOKMAが十月七日、歩行者天国で賑わう東京・銀座に登場。ユニクロ銀座店に突撃し、魚釣島が日本の領土である旨を記載したTシャツのデザイン案を、同店店長に提出したという事件がありました。

また、元妻で離婚した大川きょう子氏が『文春』・『新潮』で大川隆法総裁の私生活を暴露。私生活の内容からお金の流れをさらし、女性問題を含めスキャンダルが報道されました。

⑥ DAHN WORLD・ILCHI Brain Yoga (イルチブレインヨガ・ダンワールド)

同組織の被害報告にはこうあります（一部割愛）。

「韓国人の男性マスターも素敵で優しくてすぐに好きになり、メンバーのことを一生懸命に考えてくれる姿に心が打たれました。でもお金を使って上のトレーニングを受けていくうちに、何かが違う、これは間違っているという内なる声を聞いて我に返りました。マスターたちは皆よい人ばかりです。でも彼らは洗脳されている被害者たちです。元アメリカ人のマスターの告白文がインターネットで見ることができますが、彼女も約六万ドルを使いマスターになり、二十四時間七日間働きづめで三年間マスターを務め、目を覚まして家族の元に戻りました。ダンヨガはあなたの命を救えません、ダンヨガは地球を救えません、ダンヨガは宗教ビジネスです。お金を集めダンセンタを増やし、若いエネルギーも学歴も高いメンバーをリクルートするのが主な目的です。つぶれることはない企業だと思えますが、はまっつてはいけません。ヨガだけやろうと思つてリクルートされた若者、大金をつぎ込んだ中高年がたくさんいま

す。」

⑦ 宗教法人「泰道」（宝珠宗宝珠会）

泰道は開俊久元会長らが一九八六年二月、佐賀市に設立しました。相手の体に両手をかざして患部の痛みを取るというハンドパワー「生命の作用」を売り物に、全国に活動を展開しています。酒やジュースの味を変えたり、雲を消すことができるなどと宣伝していました。公称会員は最多時で約二万人。入会時に一四〇万円など高額の金を集めることで社会問題化し、元会員らが佐賀、長崎、福岡地裁に損害賠償請求訴訟を起こしました。泰道は一九九七年三月に解散しましたが、その後は宗教法人「宝珠宗宝珠会」と名前を変えて活動しています。

⑧ 「神慈秀明会」

同教団は世界救世教から、昭和四五年（一九七〇）三月一日に独立したことで生まれました。すなわち、世界救世教の分派教団です。独立前の前身は、世界救世教の一所属団体であり、当時の世界救世教内で最大の教会であった世界救世教秀明教会でした。神慈秀明会において聖水と位置づけられている水があり、これを塗布、または飲用することで、治病などの奇跡が起こるとされています。これは「聖水」「奇跡の水」「みたらしの水」などと呼ばれています。二〇〇六年には、大阪国税局の税務調査を受け、相続税など計約十六億円の申告漏れや、施設工事に絡んだ一億円の不正なお金の流れなどが、朝日新聞をはじめとして全国的に取り上げられたことより、教団創始者の一族である小山家が、信者の自己犠牲（自己放棄）による献金から五十億円近い個人資産を形成していたことが発覚し、新たな批判を受けたことがある団体です。

手かざし系の相談は多く、病気が治る、エネルギーがもらえるとということから組織に入り浸ったり、金銭トラブル

が起きるケースが多いです。

⑨ 自己啓発系

セミナー系団体はかなりあります。その中で、最近相談に入ったのが「オルターカレッジ」という自己啓発セミナー団体です。オルターカレッジ（オルタナティブ株式会社）は、平和イベントなどを主催するNPO法人「ピース・ビジネス・ライフ・スクール（PBS）」をフロント組織として、平和イベント参加者などに対して勧誘活動を行ったり、勧誘相手にオルターカレッジの勧誘であることを隠してPBSのイベントに誘うなどしていました。また、繁華街の喫茶店や書店でひとりである人を勧誘するといったキャッチセールスも行っていました。受講料金（入学金・授業料）は三年間約百五十万円（後に百八十万円）です。受講生は寮生活をし、その間、家族と連絡を取らなくなるケースも多く、二〇〇三年頃から受講生の親や友人からの相談が寄せられていました。二〇〇六年に、元受講生三人が原告となり、「コミュニケーションの学校と聞いて契約したのに、実態と違っていた」などとして、オルターカレッジを相手取って受講料金の返還と慰謝料合わせて約六百万円の支払いを求める訴訟を東京地裁に起こしました。

オルターカレッジ側は、一貫して「宗教ではない」と言い張っていますが、代表者は韓国人のNoh Jesu^{ノ・ジュ・ス}氏。そのNoh Jesu氏を「天のお父様」としてお祈りしていたそう。[HITOTSU学を応用したキリスト教の解析などを導入した生活実践行動体感プログラム]があったことは、Noh Jesu氏も裁判の陳述書で認めています。

オルターカレッジが原告に四百四十八万円を支払って、この訴訟は二〇〇七年に和解によって終結しました。和解にあたって口外禁止条項が付いたため、原告から和解内容を聞くことはできません。しかし裁判所で和解調書閲覧できました。それによると「被告は原告らに対し、事件解決金として金四百四十八万円の支払いがあることを認める」とあり、和解の席上で全額を支払ったことになっています。

しかし、今でも、現在はオルターカレッジ改め「アテンダーカレッジ」に変え、NR JAPAN社として開催しています。オルターカレッジの名は表向きは聞こえてこなくなりましたが、Noh Jesu氏が代表を務めるRJAPAN株式会社では、さまざまなセミナーを開催しています。

- ・気軽に学べる！コミュニケーション講座（二時間三十分）／二千円
- ・失敗の力セミナー（二時間四十五分）／二千円
- ・マインドームセミナー（四時間）／三千円
- ・アドバンスセミナー（四日間）／二十万円（宿泊費・食費・税込）
- ・スペシャルアドバンスセミナー（四日間）／二十三万円（宿泊費・食費・税込）
- ・スペシャルセミナー（四日間）／モニター特別価格十万（正規価格四十万円）

七 最後に

最後に、顕正会について、各寺院レベルでどう対応すべきかということについてお話ししたいと思います。顕正会は何の予告もなく、突然お寺の庫裏の玄関に数人のグループで訪れます。ちなみに、顕正会と同じように押しかけ法論を行う日蓮正宗系の「妙観講」の場合も全く同じです。顕正会と妙観講の違いは、物語の中に「国立戒壇」の言葉があるかないかです。

最初の切り出し口上に定型句があつて、

- ・「住職さんいらっしゃいますか」……「ご用件は？」
- ・「このお寺の歴史についてお聞きしたいのですが…」
- ・「仏法について学んでいる者ですが、質問があつて…」

・「日蓮大聖人さまとの関係についてお聞きしたいのですが…」

というようなものです。いきなり、「私は顕正会の会員だ。法論がしたい」という言い方はありません。

・「何を言いに来たのですか?」……

ところが尋ねると、これで法論に応じたというところで、「本尊が間違っている」「日蓮大聖人様の教えをねじ曲げている」「たくさんの人を地獄に落としている」などという批判を並べ立て、聞き覚えの「仏法」なるものをとくとくとの語るといふことになります。これで、短くて十五分、長くて四十五分、こちらは玄関に縛り付けられ、誹謗中傷の言葉を浴びせかけられることになります。こちらの考えを理解して受け入れるという考えは毛頭ありません。ただ、自己の正当を主張し、こちらを屈服させたいという一念で来ているのですから。

最初に申し上げるべきことは、こうした対応をすることは全く不毛であるということです。したがって、この押しかけ法論なるものに応じる必要は全くありません。断ってしまつてよいのです。ただ、断ると「やはり応えられないのか」「逃げるのか!」「負けを認めるのか!」という罵声を浴びることになります。気にしないことです。これも、彼らのマニュアルの内なのです。

顕正会は最初から自分の名前を名乗りませんし、訪問にこちらのアポをとつて来ているわけではありませんから、訪問の最初に「あなたの名前は何ですか」「所属している組織は何ですか」「何の目的でここに来たのですか」と落ちて着いて質問をしてください。こちらが応じるかどうかは我々の側に主導権があります。もし、名前を名乗らない、組織と所属を明らかにしない、目的を明らかにしない、あるいは当初の目的とは違う言動を行った時点で、「あなたと話をする理由はありませんから、直ちにお帰りください」ということで、玄関、境内、門前からの退出の勧告をしてよいと思います。もし、再三の退出勧告に反して居座り続けければ、最寄りの警察に連絡してください。考え方は押し売りに退出勧告をするのと同じです。

また、こうした押しかけ法論に応じることも自由ですから、そうする場合でも、録音などしないことや、時間を制限すること、そして、相手が宗教団体を代表しての法論なのか、個人の折伏のつもりなのかという条件を決めておくことが必要です。教団を代表して法論に来ているのであれば、「こちら宗門を代表する立場の者が必要なので、書面にて申し込んでください」と返します。個人ということならば「宗教法人〇〇寺の住職ではなく、個人としてお答えします」と念を押してから開始してください。

基本としては、前もって顕正会の言いたいことをよく知っておくことです。顕正会の折伏理論書『日蓮大聖人の仏法』や、勸暁書『日蓮大聖人に帰依しなければ日本は亡ぶ』という顕正会の出版物を読めば、全てはその中から出てきている論理構成であることが分かります。どの会員も同じ内容を同じマニュアル、すなわち、「ああ言えばこう言い返す」という準備が出来ていますから、相手の組み立てのマニュアルを先まわりして質問してやると、論理が空回りして彼らが用意している「かみ合わせ」が狂います。

彼らの詰問の項目や内容については詳しく論じることは出来ませんが、昭和三十年の小樽問答の時のやり方と同じです。本来宗門も現宗研でも、小樽問答の内容についてはもっとと研究して答えを出しておくべきです。

例えば、「日蓮宗の宗定御本尊はなぜ臨滅度時本尊のですか（弘安二年の本尊＝戒壇の本尊ではないのか）」「御本尊を身延山のお店でみやげものとして売っているのはなぜか？」「鬼子母神、三十番神、稲荷尊、七面尊などを祀ることは雑乱勧請なのではないか」などです。

これからご生誕八百年という節目の聖日を迎える日蓮宗ですが、日蓮系信仰宗教団体、もちろん創価学会も顕正会にとっても大事な聖日です。私の地元神奈川二部でも、顕正会の盛んな新潟でも、龍口法難七五〇年、佐渡法難七五〇年を迎えます。とくに、ご生誕聖年よりも、諸天善神のご加護のあつた両法難の年は、彼らにとって信仰エネルギーの源泉、神秘体験の要素を持つところの特別な信仰要因と意識されていますから、その解釈と顕彰をめぐって将来

大きな問題となるでしょう。

顕正新聞には、「竜口における御振る舞い」という見出しで、「国事犯」として逮捕、ただ一人大聖人を召し取るのに、この仰々しき、数百の武装兵士を率いて、大聖人様を謀反人、内乱を起こす者、いわゆる「国事犯」に仕立てる演出だったとして、下種本仏成道御書「其の時の御勘気の様も常ならず、法にすぎて見ゆ。了行が謀反ををこし、大夫の律師が世を乱さんとせしを召し取られしのも越えたり」と結んでいます。

さらに「日本国の柱を倒す」と「あらをもしろや、平左衛門殿がものに狂うを見よ。とのばら、但今ぞ日本国の柱を倒す」など、八幡大菩薩をご叱責と「今、日本第一の法華経の行者たる日蓮が頸を切られんとするに、法華経の会座で末法の法華経の行者を守護し奉ると釈尊に誓状を立てた諸天善神が、なぜその誓いを果たさないのか」と。また、四条金吾の忠誠「不覚のとのばらかな、これほどの喜びをば笑へしかし」と。このように、この龍口法難が特別であることを強調して信徒に信心を喚起しているのですから、鎌倉の諸本山や諸寺に頻繁に「折伏」が行われるのも当然です。その意味では、本宗は生誕八百年に向けての宗門運動とばかりは言っていられない状況であるということも理解して欲しいところです。

小樽問答の本宗の対応、それ以後創価学会問題を含め、まともな対応をしてこなかった宗門は、この節目に向けてどう対応するのか。創価学会問題、そして、顕正会問題も、一般社会や宗教学者から見れば、日蓮聖人の宗教の本来元である日蓮宗の問題として捉えられています。もしこの対応をおろそかにして、社会により一層の被害者が多くなった場合、日蓮宗が批判されることになりかねません。オウムの問題では日本の伝統仏教に対して批判が起きました。私には「寺離れ」という現象も、伝統仏教に対する失望感から来るものではないかという思いがあります。その流れで言えば顕正会問題は日蓮宗の問題なのです。法華経と日蓮聖人の宗教から、本当にこんな過激で反社会的な宗教が生まれるのかと問う声にさらされるのではないのでしょうか。さすれば宗門運動どころではなく、社会や各宗から

も社会的責任を果たしていないと非難を受けることになります。

そうならないためにも、この際、しっかりとした対応と、研究が不可欠ではないでしょうか。この問題から私たちは決して目を背けないでほしいと思います。以上で講演を終了します。ご静聴ありがとうございました。

※編集部註

カルト教団を講ずる場合、その反応に十分な注意をしなければならぬ。換言すれば、訴訟などの問題が発生する恐れがあるため、「オフ・レコ」にして、その場に聴衆として集って頂いた方のみへの情報とすることを余儀なくされる部分が相当程度発生する。

よって、楠山師の講演の全てを収録したいのはやまやまであるが、文中、いくつかの教団についての言及部分を削除せざるを得なかったことを諒とされたい。